

[別紙 2]

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 長 直 子

本研究は精神分裂病患者の家庭内のストレスを軽減し、長期的には患者の予後の改善に寄与するために心理教育プログラムを実施し、その効果について検討したものであり、下記の結果を得ている。

1. 精神科病棟に入院した精神分裂病患者 40 名とその家族に、それぞれ患者グループ、家族グループによる心理教育プログラムを実施し、対照群 46 名との比較を行った。心理教育が家族に及ぼす効果について家族の自記式調査から把握したところ、家族の患者ケアに関する特異的自己効力感が高まっていることが示された。
2. 患者の再発との関連が明らかになっている EE の批判的言動と関連の強い家族の患者に対する拒否感について、介入群では改善が対照群では悪化が示された。
3. 生活者としての家族機能の障害をとらえた生活困難度について、退院時に比べ退院 9 ヶ月後時点で介入群では改善していることが明らかとなった。
4. 主治医による患者の症状評価からは、退院時および退院 9 ヶ月後時点において介入群で陰性症状が改善していることが示された。
5. 主治医による症状評価および患者の自記式調査から、介入群の患者では治療の必要性の認識が客観的・主観的に改善していることが示された。
6. 患者の社会機能について家族が評定した調査からは、介入群で改善していることが示された。患者の社会機能が実際に改善しているか、もしくは患者の行動に関する家族の認知が肯定的な方向に改善された可能性が示唆

された。

以上、本論文は心理教育の実施が精神分裂病の家族と患者にもたらす効果について明らかにした。本研究は、精神分裂病の心理教育の効果について比較群を設定して検討を行った日本で初めての研究であり、精神分裂病の心理社会的治療における臨床的な意義も大きいと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。